

磐梯朝日遷移プロジェクト臨時談話会についての報告

2014年11月11日(火)の9:00~10:20に、磐梯朝日遷移プロジェクトの臨時談話会(兼生物系研究室臨時セミナー)が開かれました。演者は、鳥取大学地域学部地域環境学科の永松大先生で、『天然記念物「鳥取砂丘」の土地利用、植生の変遷と管理』と題して講演してくださいました。授業時間帯に行われた臨時の談話会でしたが、17名の学生や教員が参加し、講演の後も予定時間を20分オーバーして熱心な討議が行われました。

鳥取砂丘では、少なくとも過去50年にわたり国内の海浜砂丘と同様に開発が進められてきました。現在はその一部が砂丘として残され、学術的に貴重な環境であるため、一部が国立公園の特別保護地区や国の天然記念物に指定され、世界ジオパークにも登録されています。その証拠に、環境省レッドリストに掲載されているような貴重な植物が多く生育しているということが紹介されていました。

ところが、国内で最も有名な砂丘の1つである鳥取砂丘ですが、帰化植物、観光資源としての活用と植生維持の両立など多くの問題も抱えています。砂丘の西側では帰化植物が多く、様々な手段を用いて駆除を行う一方、東側では観光のため植生の変遷が進まないようにし、その間ではなるべく自然のままの保全をしているそうです。その他、ヘリコプターによる救助の訓練や、パラグライダー教室、小学校の運動会など、国立公園の特別保護地区や国の天然記念物のすぐ隣とは思えないような利用がなされていることに驚きを感じました。

磐梯朝日遷移プロジェクトで多くの調査が行われている裏磐梯地域も、世界ジオパークへの登録を目指しているほか、帰化植物、観光資源としての活用と植生維持の両立など、鳥取砂丘と同様の問題を抱えています。今回の鳥取砂丘に関するお話は、裏磐梯地域の今後を考える上で参考にしていくべき、とても有益なものであると感じました。

報告：黒沢研究室4年 遠藤 優年

